

# スポーツに内在する問題について（２）

—スポーツに期待されるものを考える—

幼児教育学科 岡部修一

## 1. スポーツの意義

世はスポーツ花盛りである。スポーツに関するニュースや話題が耳目に触れない日はない。ほんの半世紀ほど前まで貴族や富裕層などの特権階級に独占されるレジャーであったスポーツが、その後大衆化された時代を経て、今ではかつて想像もしえなかったような発展と繁栄を成し遂げている。そしてスポーツと人間、社会との関わりは多様な広がりをもつに至った。

現代では、多くの人々にとってスポーツは非常に身近な存在であり、自ら楽しむ機会をもてる時代を迎えた。また心身を極限まで高めたトップアスリートやプロスポーツ選手の超人的パフォーマンスは世間の注目を集め、人々に大いなる熱狂をもたらす。そして多数の人々に支持される人気スポーツは、巨額の金銭が動くビッグビジネスとして経済活動の一翼を担うまでになっている。

ユネスコの「体育およびスポーツに関する国際憲章」（1978年11月21日ユネスコ総会採択）第2条2の2項には「個人のレベルでは、体育・スポーツは健康維持と増進に貢献し、健全な余暇の利用を提供し、現代生活の欠点の克服を可能とする。社会的レベルでは、体育・スポーツは社会関係を豊かにし、スポーツだけではなく社会生活にとっても欠くことのできないフェアプレーを発達させる。」とある。すなわち現代においてスポーツは、個人とも社会とも深く関わり大きな影響力をもつものとして認識されており、特に「…体育・スポーツは健康維持と増進に貢献し、…」の部分に表される、スポーツと人間の新たな関係に注目しなければならない。

現代では、豊かで満ち足りた食生活を送る人々の間で運動不足と健康障害の問題が顕在化し、また高齢化問題が迫る社会ではアンチエイジングへの関心が高まっている。そしてスポーツと健康づくりの融合を図ることは、社会の今日的、将来的な課題である。運動不足がもたらす肥満、生活習慣病、メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）などの内科的疾患や、加齢とともにもたらされる骨や関節の障害などの問題は、個々人の範疇にとどまらない。例えば医療や福祉介護にまつわる公的予算支出の増大を生み、また医療や福祉業務に携わるマンパワーと予算の不足が医療体制や福祉政策の後退をもたらすなど、大きな社会問題化し、将来への深刻な懸念事項となる可能性が高い。

健康の維持増進に関しては、スポーツ科学や医学の分野が連携した研究がすすめられ、さまざまな情報発信も行われている。しかし健康づくりと運動、スポーツの関係について、一般の人々の認知あるいはスポーツ環境の整備、支援が十分に行われているとは言いがたい。これからの時代、「人は健康を自ら積極的に獲得していく必要がある」として自助努力が求められるようになる。スポーツや運動は、スポーツ選手のためだけでなく、趣味や娯楽としてだけでなく、健康づくりに不可欠なものとして広く

社会の認知を受け、実践されていく必要がある。

このように、人間の社会生活に欠くことのできない存在となったスポーツについて、人々がいだく印象は、一般的に好意的である。正々堂々としたフェアプレー精神、困難や苦しさを乗り越えようとする克己心や忍耐力、目標に向かって一心不乱に汗を流して努力するひたむきさ、そして真摯な取り組みの結果として得られる達成感や充実感など、不公平感や閉塞感の蔓延する社会の中では、共感を得て高い評価を受けるものが多い。このようにスポーツがプラスイメージで受け取られるのは、たとえば健康づくりの基盤としてスポーツや運動の普及促進を図るには、好都合であるし、また一流スポーツ選手の活躍に注目が集まれば、社会に活気と活力を生み出されることにつながり、人々のスポーツや運動に対する関心と欲求をさらに高めることもできる。

しかしスポーツで起きる出来事は、いつも我々が求めるものや期待するものを与えてくれるとは限らない。スポーツの社会的影響力とりわけ青少年をはじめとする若い世代への影響は極めて顕著である。スポーツ選手の行動や振る舞い、発言といったものの中に、反社会的あるいは倫理的に外れるようなものがあれば、社会風潮がミスリードされ、スポーツに対するマイナスイメージが生まれることもあり得るのである。

## 2. スポーツにおける挑発行為

スポーツに勝敗はつきものである。とりわけ人々が熱狂するプロフッショナルスポーツ（以下プロスポーツ）界においては「結果がすべて」といわれ、勝ち負けへのこだわりは極めて強い。もちろんプロスポーツでは生活がかかっており、勝つことに執着するのは当然である。しかし、極端に行き過ぎた勝利へのこだわりは、世間の激しい批判と非難を浴びることになる。

スポーツ界での勝利至上主義の弊害はすでに長きにわたり唱えられてきた。薬物によって肉体改造や機能改善を図るドーピング問題、あるいはかつて旧東側諸国の一部で行われていた国家主導による幼少期からのスポーツエリート養成システムなどが代表的な事例である。それぞれ内臓的副作用の発症と人体の健全な発育を阻害する危険性が指摘され大きく批難された。

また豊富な資金力にもものを言わせた有望選手の青田刈りやかき集めなども、批判を受けることが多い。つまり、概して人々はスポーツに対し、何をしても勝てばいいとは考えていないということである。

選手宣誓では「スポーツマンシップに則り正々堂々と…」と語られるものの、特に球技など相手と接触する競技において、審判が把握しきれない部分での粗暴な振る舞い、不正行為などが横行している。これはプロスポーツの試合や国際大会から身近なスポーツの大会に至るまで、レベルや年齢を問わず頻繁に見受けられる。このような勝利至上主義による弊害のひとつにあげられるものに挑発行為がある。

どのスポーツ競技でも「パフォーマンス発揮の上で精神的影響は大きい」と語られ、相手の心理的動揺を誘うひとつの手段として挑発行為――主として言葉やポーズによるものだが――が行われている。

FIFA主催のワールドカップ決勝戦、フランスの主力でありスター選手のジネディーヌ・ジダンが延長後半5分、イタリアのマルコ・マテラッツィ選手の胸に頭突きをくわえて退場となった。プレーに

は全く関係のない場面であった。サッカーを志した者ならまさに夢舞台であるワールドカップ決勝戦、しかも同点での延長戦の局面で暴力行為をはたらくとは、まさに正気の沙汰とは思えぬ暴挙である。ジダンは何れ頭突きをしたのか、世界中に放映されていた中継画像を観るかぎり、マテラッツィ選手の発した何らかの言葉がジダン選手の逆鱗に触れたことは間違いない。その言葉についてはさまざまな憶測が流れたが、どうやらジダン選手の家族についての侮蔑的発言であったらしい。世界最高峰の試合中に行われた侮蔑的発言と暴力行為、およそスポーツの清々しさや公明正大なイメージとはかけ離れている。しかし、ワールドカップであれ大学リーグ戦であれスポーツの試合中、相手の心理的動揺を誘い冷静さを失わせるためと称して、侮蔑的発言や罵詈雑言に近い言葉による挑発が行われることは決して少なくない。筆者自身かつて大学スポーツの指導者を務めていた頃、大学生スポーツ選手が口にする品性のかげらも感じられない挑発的発言に耐え難い嫌悪感をいだき、激しい怒りを覚えた経験がある。

スポーツは、スポーツマンシップに則った正々堂々の戦いの場であり、挑発行為の一切を禁じるべきだと言うつもりはない。ただ、罵詈雑言や誹謗中傷の類は、口にする者の品性や人格を疑われ、自らの精神的未成熟さや自尊心の無さを露呈することに他ならない。

### 3. スポーツによる負の影響

8月初旬、ひとりのプロボクサーがタイトルマッチに勝ちチャンピオンの座についた。3人兄弟の長男である彼は、コーチである父親の下で過酷なトレーニングを積み重ねてきた。父子鷹でチャンピオンへの夢を追い見事に成し遂げた成功物語は、普通であれば世間に大きな感動と賞賛を生むはずだった。しかしタイトルマッチでの疑惑の判定はじめ、彼を利用しての視聴率稼ぎを企てるテレビ会社主導による出来レースの存在を感じさせる事実などによって、世間の評価は賛否両論分かれるところとなった。その結果、純粋に力と力の勝負と思われていたプロボクシングに対して世の人々の多くが、筋書きのあるスポーツショーであるかのような印象をもってしまったことは大きなイメージダウンである。

この一家は以前からマスメディアが大きく取り上げ、あたかも時代の寵児であるかのような扱いを受けていた。注目を集めたのは、その特異な言動と悪ぶった態度である。マスメディアで発言する際、彼らはおおよそ敬語、丁寧語といったものを全く話さず、そのしゃべり方は常に若い世代が言うところの「タメ口（友人としゃべるくだけた口調）」であった。しかもいわゆるビッグマウス、それも並みはずれた自信過剰ぶりや驕横さ、傲慢さを感じさせるような言動である。しかし、常に刺激的でセンセーショナルな話題を求めるマスメディアにとって、真面目な優等生タイプよりもアクの強い変わり者である彼らは、絶好の取材対象であり大々的に取り上げる価値のある存在であるのは間違いない。

タイトルマッチ調印式の日、ベネズエラから来たチャンピオンに対して、見下したような不遜な態度で接した彼は、ベビー人形を渡す挑発行為を行った。その翌日の計量会場で、前日のお返しとばかりチャンピオンからおしゃぶりを差し出された時、つかみかからんばかりに激高し、さらには父親までもが加勢して詰め寄ろうとするに至って会場は騒然となった。マスメディアにとっては、願ってもない報道対象となったが、これがもしチャンピオン側も承諾しての茶番劇でないとすれば、もはやスポーツと称

するに値しない、子供の喧嘩にも等しい見苦しさである。

挑発に挑発で返され、激怒する彼の態度はあまりに幼児的である。自分の方は何でも思うとおり行動するが、他人が自分の意にそぐわないことをするのは許さないというのは、自己中心主義の極みであり、考え方や価値観の異なる相手を認めないという狭量さの表れである。現代社会の対人関係の問題はここに端を発することが多いし、さらにテロリズムの多発で緊迫する世界情勢における文化的（宗教的）対立の根幹も、突き詰めればこういった傲岸不遜にあるといっても過言ではない。

スポーツのパフォーマンス発揮には、アドレナリンが分泌され高い興奮状態が必要である。しかし同時に精神的な冷静さと判断力を保つという、矛盾した状況が求められる。「パフォーマンス発揮の上で精神的影響は大きい」とされることも合わせ考えれば、スポーツにおいて心や気持ちをコントロールすることは、スポーツ選手としての成熟度、到達レベルに大きく影響すると考えられる。

ボクシングは格闘技であり個人主義の極みであるゆえ、相手を思いやる必要などないと言われるかもしれない。しかし相手を傷つける危険性もある格闘技だからこそ、相手への尊厳をもち、試合を離れた場では互いを認め合うことが不可欠である。そういった精神的なコントロールが出来ることこそがスポーツであり、それが無ければただの喧嘩もしくは傷害沙汰に過ぎない。大相撲においても取り組み後に冷静さを失い、土俵外で傷害事件を起こした事例が7月と9月にそれぞれ1件ずつ発生した。

またプロ野球でも、ペナントレース終盤の熾烈な首位争いのさなか、チームのエースピッチャーが勝利投手の権利を得るまであとひとりの場面で降板を命じられ、外国人監督に対して激怒した。そして取り囲むメディアを前に「外人監督だから個人成績なんてどうでもいいんでしょう。監督はじめスタッフの顔も見たくない。今後の登板？若手たちがいるから俺の出番はないですよ」と凄まじい剣幕でまくしたてる騒動が起こった。首脳陣批判として事態を重くみた球団フロントは、彼に出場停止処分を下し、その結果、彼は長年目標にしていたシーズン1位通過の感激の場にも、日本シリーズ出場をかけたプレーオフの場にも参加することが出来なくなってしまった。そして優勝へ向け一丸となって戦うムードに水を差すような彼の自分勝手な考え方と暴言に、同僚選手たちからはひと言の擁護も無かった。

気に入らないことや思い通りいかないことに対して、感情のままに言葉を発したり振舞ったりするのは、賢明ではないし取り返しのつかない事態に至ることもある。そして何より周囲の信頼を失うことにもつながるのである。

世間の関心と注目を集める人気スポーツ選手の行動や振る舞い、言動は社会に多大な影響力を及ぼす。自己中心的で相手を認めず、傲慢で不遜な態度をとり、感情のままに振舞うようなことは、特に青少年世代にはよからぬ影響を与える可能性もあり、また勝てばあるいは強ければ何をしてでも許されるという誤った幻想もいだかせる。ただでさえ利己的で個人主義がはびこる社会風潮に、このようなスポーツの悪影響は、負の連鎖を生み出すと憂慮される。

## 4. 自己責任

スポーツの中で唯一、審判がないのがゴルフである。ルールブック冒頭の「ゴルフ規則の本質と精

神について」には「ゴルファーは皆、誠実であり故意に不正を犯す者はいないというのが基本である」と記されている。一般人がレジャーとして楽しむゴルフでは、その理念はなかなか実現されていない。スコアのごまかしやボールの移動、ライの改善などが行われることも少なくない。しかし遊びのゴルフならともかく、競技ゴルフとプロのツアー大会では公明正大の精神に基づき、不正は厳に慎まれるべきである。ところが今夏、この根本理念を揺るがすに等しい事例が発生した。ひとりの男子若手プロゴルファーが日本オープン最終予選のホールアウト後、スコア提出所で自らのスコアを少なく改ざんしたのである。ところがマーカを務め確認署名もした同組競技者の指摘によって発覚、ルール上マーカが無署名のスコアを提出したとして大会失格となった。しかしプロゴルファーが競技大会においてスコアを改ざんした前代未聞の事態だけに、問題は収まらずJGA（日本ゴルフ協会）は本人および関係者から事情聴取を行い、処分についての慎重な検討を続けた。その際、当の若手プロはスコア改ざんについて「故意ではなく単なるミス、当日は腹痛で頭がぼーとしていた」との弁明に終始した。最終的に5年間競技大会出場停止との裁定が下されたが、スコア改ざんはゴルフ精神の根幹を揺るがす不正だけに処分をめぐって賛否両論の論議を呼んだ。だがもっと問題視されるべきなのは、処分が下された際、この若手プロゴルファーの「意図的なスコア改ざんとみなされたことに対し、信じられない気持ち」というコメントである。この発言には、自らが犯した行為の重大さに対する責任の認識や自戒の念はまったく感じ取れない。故意であろうとなかろうと、スコア改ざんというゴルフにおける重大な背信行為を引き起こした事実について、責任を感じることも謝罪もせず、ミスだから仕方ないという自己弁護するかのような態度は、ゴルフ界だけにとどまらず社会でも到底容認されるものではない。自分の起こした行為に対する責任感や罪の意識の欠如、モラルハザードは今、日本社会で大きな問題となっている。自分の起こした行為に対して、責任を感じることも取ることもなく、あるいは原因を他の何かに転嫁しようとさえする風潮は、実に由々しき問題である。

一方、同じプロゴルフツアーにおいて、スコア改ざんと対極にあるような、自己責任を強く認識させる事例があった。今年賞金獲得額1位に位置する女子プロゴルファーが、2週連続優勝を果たした翌週の大会予選1日目に、練習用のクラブを入れたままスタートしてしまい、途中でクラブ本数超過のルール違反に気がついた。競技委員を呼んで本数超過を自己申告、4打罰のペナルティを受けた。顛末の記事を掲載したゴルフ雑誌によれば、「ホールアウト後、彼女を担当したハウスキャディが自分のミスと考え、クラブ側に翌日の辞退を申し出、クラブ側も了承した。だがその女子プロゴルファーは「すべては自分の責任」として、クラブ側に「明日も同じキャディさんお願いします。二人でやり直させてください」と申請。4打罰のペナルティを受ける苦しい状況から、前日と同じキャディとともに2日目に臨み、見事予選突破を果たした。さらに最終日は猛チャージをみせ最終成績は首位から4打差の9位タイで終えた。この女子プロゴルファーは、「超過クラブを見逃したのはすべて自分の責任」と納得し、キャディを責める気持ちなど微塵もなかったはず」と結んでいる。そもそもクラブ超過は黙っていればわからない可能性もあるのだが、彼女はゴルフ本来の精神に基づいてきちんと自己申告し、さらに責任を感じるハウスキャディへの対応も含め、すべては自己責任と納得の上で前向きにすすんだ彼女の態度は、これぞスポーツマンという潔さである。このような潔さは、人々がスポーツに期待するもののひとつである。勝者と敗者が必ず存在するスポーツでは、勝って驕らず敗れてクサらず、謙虚で向上意欲が旺盛

な態度が賞賛される。その中でもとりわけ敗者の美学に注目が集まることが多く、言わば Good Loserこそが求められる。スポーツにおいて努力と健闘空しく敗れ去った敗者が、悲嘆にくれ虚無感あふれる状況下、悔しさに耐えながら素直に負けを認め勝者を称える潔さや爽やかさ、また悔しさに前向きに立ち向かう不屈の闘志とあくなき向上心などを、見せてくれること期待しているのである。苦境に立つときこそ真の人間性が発現するといわれている。苦しい時に清々しく立派な態度をとることは、自らの現実生活ではなかなか体現できない。ゆえに人々は、それをスポーツ選手に求めるのである。

## 5. 潔さの美学

スポーツ選手の潔さに関して、2月にイタリア・トリノで開催された冬季オリンピック大会で失望させられる場面に出合った。スノーボードのハーフパイプ競技は、ワールドカップで上位入賞した実績から金メダル獲得も期待できるとの前評判であった。しかし結果は男子4人全員が予選落ち、女子も最高9位ということで惨敗に終わる。これは協会やナショナルチームが、事前の実力把握を見誤ったという。スノーボードではアメリカ勢を中心とする世界トップレベル選手は、賞金レースやショーコンテスト形式の試合を重視、ワールドカップ等にはほとんど参加しない傾向がある。日本勢はいわば飛車角落ちのワールドカップであげた好成績を過大評価しメダル獲得が可能と予測していたわけで、まさに「井の中の蛙大海を知らず」の諺どおりである。大風呂敷を広げみじめな結果に終わったことに関しては、日本はスノーボードの練習環境に恵まれないことや、世界トップレベル選手と身近に競い合える場がないことなど、やむを得ない要因もある。問題の場面とは、代表として出場していた兄妹選手についてである。この兄妹は男女それぞれの予選演技滑走において、予選突破が不可能になるほどの大きなミスをおかした。そのあと、兄の方はフィニッシュラインを超えたところでうつ伏せに倒れ、まるで幼児が駄々をこねるように両手をバタつかせながら泣きわめいた。その様子は衛星中継で全世界に放映されていた。一方、妹は演技中に転倒、腰を痛めたのか立ち上がれなくなる。関係者が救護しようとしたが拒否したらしく、仰向けに倒れたままフィニッシュラインめざしノロノロと滑り続けた。通常ひとりの選手が費やす演技滑走時間の倍以上かけて、仰向けのまま彼女はゴールした。その様子を「執念のフィニッシュですね」とスノーボード関係者が語っていた。

スポーツ選手における潔さの概念は難しいが、残念ながらこの兄妹選手の行為は見苦しさ以外の何者でもないと考える。フィニッシュ直後のコース上に倒れこんで、自らの悔しさ、不甲斐なさを感情のままに露呈するのは、成熟したアスリートの姿ではない。子どもの反応である。

また演技続行不可能という状態になりながら、ただフィニッシュしたいがためにノロノロ寝たまま滑り続けたのは、あまりに利己的な行為というほかない。この兄妹選手たちにとっては、オリンピックの舞台でも自分の存在がすべてであり、競技場の空間で自分が思うとおり勝手に振舞うことが許されると考え違いしている。アスリートとして彼らはあまりに幼すぎると言うほかはない。今後、彼らに精神的な成長がもたらされれば、競技パフォーマンスが向上する可能性もあろうが、そのような人格陶冶に関する分野を教え導くことのできる指導者が必要である。しかし精神的未成熟ゆえの自己中心的なあの行動

を「執念のフィニッシュ」などと評するスノーボード関係者に、彼らを正しく導くことができるのかどうか極めて疑問である。

## 6. 想像力の欠如

昨夏、甲子園大会で優勝した後、部長の暴力行為で揺れた駒大苫小牧高校が、今春のセンバツ大会を間近に控えた3月初旬、卒業する3年生野球部員の居酒屋での飲酒喫煙が発覚し、出場辞退に至った。出場すれば優勝候補筆頭といわれていただけに世間に与えた衝撃は大きかった。それにしてもまた高校野球連盟（以下、高野連）の悪しき慣習である「連帯責任」が行われた。現チームに直接関係ない3年生部員の行為によって、下級生たちが罰を受けるのは筋違いだし、とても教育的配慮が行き届いているとは思えない。高野連への疑問については前回述べているので、今回は飲酒喫煙をした3年生部員に視点を置いて述べる。

生活のすべてを高校野球に注ぎ込み、目標である甲子園出場を果たし、さらには全国優勝という夢さえも果たした彼らが、母校そして後輩たちの甲子園出場が間近な時期に、なぜ飲酒喫煙という行為におよんだのであろうか。20歳未満の飲酒喫煙は法に違反しており、摘発されれば弁解の余地はない。そして違法行為うんぬんより、ほんの半年前まで高校野球界に身を置いていた彼らであれば、飲酒喫煙という行為が「極めて重大な不祥事」に相当することを認識していなかったとは考えにくい。しかし彼らは後輩たちの甲子園出場が迫った段階で、敢えて表現すると、信じがたい暴挙に出たのである。出場辞退に追い込むための故意とは考えたくない。いやしくも高校野球というスポーツに傾倒した彼らが、万が一問である後輩を陥れるようにするようなことがあれば、それはもはや野球人としてもスポーツ選手としても、そして人間としても赦されない。

それではいったい彼らは何を考えて人目につく居酒屋で飲酒喫煙を行ったのか。意図的でないとすれば、行動の結果に対する想像力の欠如というほかはない。人間は自らのさまざまな欲求や欲望を、抑制し我慢しながら生きている。その抑制手段のひとつとして、とくに法に反するような事柄については、自らの行為が引き起こす可能性のある最悪のシナリオを想像する。その悪い結末に対して恐れと怯えをいだくことで、自制心が働くのである。ところがこの想像力の欠如や、自分だけは大丈夫との根拠のない過信によって、重大な事態を引き起こしたりする。

昨今の日本では、飲酒運転による悲惨な事故や子が親を殺傷するような事件が少なからず起きている。飲酒運転で万が一事故を起こせばすべてを失い人生が暗転する可能性もある。しかし飲酒運転の常習者は、自分だけは大丈夫という根拠のない思い込みによって、このような怖れをいだかない。また注意されてムカつく、うっとおしいからと親を手にかける子どもの場合は、その犯罪行為が自らの今後にどう影響するのかということに考えがおよばず、短絡的に実行に至ることが多いと考えられる。これらはいずれも、行為の結末に対する想像力の欠如である。もちろん未来に向けての行動において失敗や痛手を恐れるあまり消極的になり過ぎては、自らの可能性や成長を阻害してしまうことになる。しかしそれは犯罪や反社会的行為でない限り、という範疇においてのこと、法に反し犯罪になる可能性が

あるような行為については、その結末を恐れ自重することが肝要である。想像力の欠如によって刹那的、あるいは短絡的な行動に走る人間が増えている社会風潮が、スポーツ界にも蔓延しつつあることは憂慮すべきことである。

## 7. まとめ

スポーツは決して公平ではない。勝者と敗者を決定づける厳しさや冷酷さが存在し、闘争本能を具現化する荒々しさも持ち合わせている。それでも人はスポーツに対し、目標に向かって突き進む充実感や達成感を追い求め、あるいは清々しさ、潔さ、ひたむきさなど人間としての精神的な高尚さを期待する。また体力、運動能力を極限まで鍛え上げた一流スポーツ選手の超人的パフォーマンスに熱狂し、共感をいだいて声援を送り続ける。

昨今、世の中では利己主義や他者への迷惑や考えない独善的な行動が目立ち、倫理観やマナーに反する振る舞いが蔓延している。こうした社会風潮に煽られるかの如く、スポーツ界においても人々の期待を裏切るような状況が多く起こっている。傲慢な態度をとり、平然と不正をはたらき、周囲への迷惑もかえりみぬ自分勝手な振る舞いをし、それでも社会に許される認められると考えているなら、スポーツに未来はない。経済状況が落ち込んだ時に、真っ先に切り捨てられるのはスポーツである。それはバブル崩壊以後の日本で、いったいどれだけの企業スポーツチームが休廃部し解散してきたかを考えれば、明らかである。人間の闘争本能を呼び覚ます荒々しさや激しさも含有するスポーツだけに、規律に基づいた自尊心、他者への思いやりや感謝、自己抑制などの精神的な高邁さや成熟といった、心の平衡感覚を持ち合わせなければならない。激しさと穏やかさ、その相反する両面を備えてこそ真のスポーツ選手であり、そのためには、人間性や人格の陶冶および精神的成熟度が必要である。

そして一流スポーツ選手には、常に行動や態度、言動も含め人々の規範となる姿が求められている。今後のスポーツ指導者は育成に関して、このような観点でのコーチングとカウンセリングを行っていくことが不可欠である。

### 参考文献

- 1 上田 誠 (2006) エンジョイ・ベースボール NHK出版
- 2 岡澤祥訓 (2001) メンタルを考えよう 株式会社卓球王国
- 3 岡部修一 (2005) スポーツに内在する問題について 奈良文化女子短期大学紀要第36号
- 4 辰濃哲郎 (2006) マイナーの誇り 日刊スポーツ出版社
- 5 玉木正之 (1999) スポーツとは何か 講談社
- 6 (2006) アルバトロス・ビュー 9月28日号 (株)ALBA
- 7 (2006) サッカー批評 issue32 双葉社
- 8 (2002) 書斎のゴルフ Vol. 5 ぶんか社
- 9 (2006) Sports Graphic NUMBER 648 文藝春秋
- 10 (2006) GOLF TODAY No.366